

書評

赤井 益久著

『中唐詩壇の研究』

愛 甲 弘 志

京都女子大學

「文章を編纂するという行爲は、自らの文學的營爲を客觀的につき離して見、そしてそれを當時の状況の中で位置づけ、自らの役割を主張するということでもある。つまり、詩文に對する自覺的かつ主體的な考えなしには成り立ちにくい」とは、嘗て本書の著者、赤井氏が「元稹の政治と文學」と題する論文の中で述べたことばである。これはまた赤井氏が本書を著した際の態度にも通じているし、更には評者である私も當然、承知していなければならぬのだが。赤井氏の研究は中唐という時代研究、詩人研究、主題研究

書評

というふうには、その論考が至つて多岐に亘つていけば、満遍なく評することなど評者の手に剩るのであつて、ただ徒に思いつくままにことばを費やすしかないことを先ずはお断りしておかねばならない。

さて後の説明の便のため、本書の構成を記すと以下の通りである。

○中唐文學研究序説

○第I部 大曆から元和へ

第一章 「大曆から元和へ」——『中唐』の文學史的意味

味

第二章 「劉長卿詩論」——長洲縣尉の左謫を中心に

第三章 「韋應物詩論」——屏居の位相を中心に

第四章 「『王子直韋柳』評考」——『王韋』から『韋柳』へ

へ

○第II部 韋應物と白居易

第一章 「韋應物と白居易」

第二章 「諷諭詩考」——韋應物の歌行・雜體詩の影響

を中心として

第三章 「閑適詩考」——「閑居」から見た閑適の理念」

第四章 「白詩風景考」——「竹窗」と「小池」を中心

として」

○第Ⅲ部 諷諭詩の系譜

第一章 「中唐詩壇諷諭詩の系譜」

第二章 「張王樂府論」

第三章 「送寒衣」——唐詩「送衣曲」をめぐる

第四章 「元稹の文學理念」——元和五年を中心に」

○第Ⅳ部 謫遷と文學

第一章 「劉禹錫の謫遷と文學」——朗州司馬期の寓言

文學を中心に」

第二章 「劉禹錫の賦について」

第三章 「孟郊論」——仕官前の恬澹と執着」

○第Ⅴ部 周邊からの照射

第一章 「中唐における『吏隱』について」

第二章 「郡齋詩について」

第三章 「大曆期の聯句と詩會」

第四章 「中唐の『意境説』をめぐる」

○あとがき

「中唐文學研究序説」

本書を「中唐詩壇の研究」と命名したことについて、赤井氏は本書の解題とも言うべきこの「中唐文學研究序説」(※傍點は評者)で、(本書所收の各論考は、中唐文學の諸相を通して、その文學史に占める位置と意味を考察し、同時に中國文學史の研究に還元しうることを念頭に置きつつ執筆されている)(第三頁)と述べた上で、(したがって、中唐文學の研究は、ひとり「詩壇研究」に止まらず、「唐代小説研究」「古文研究」とともにあるべきであるが、おそらくは文學史に占める意味からすれば「詩壇研究」は決定的であるだろう)(第三頁)と説明するのである。これに似た考え方として、蔣寅氏も清初の葉燮の著作『原詩』について論じた「葉燮の文學史觀」と題する論考で次のように述べている。^②

そして詩歌は「一見最も歴史的と無關係」であり、「最も純粹で、最も社會の影響を受けない形式を用い

て人の心を動かす事ができる」ため、普遍的に最もよく文學の本質的特徴を代表するものと見なされ、「詩趣」「詩的」は「文學的」の同義語とされてきた。このような認識に基づけば、詩歌の歴史的發展は、文學史の原理を考へる上で参考とすべき重要な史料となる。もしある詩論の著作が、詩歌の歴史發展について深みのある思考と卓越した見解を示していたならば、その背後にある、詩についての作者の史観、いわば詩史観は注目するに値し、またそこから更に文學史の原理に對する作者の全體的な理解を探ることもできる。私の見たところでは、葉燮の『原詩』はまさにこうした條件を具えた、出色のテキストである。

中國文學の歴史を振り返ってみれば、誰しも認めるように、とてつもなく永い間、詩がその中心にあつたという歴史的事實を根底で支えていたものの意味はやはり大きいと言わねばならない。詩人たちによって創られた詩作の多さは言うに及ばず、時代が移ろい、王朝が替わつて、語られる過去の文學のその殆どは詩についてであるし、また歴代

の文人が展開する文學論も大半が詩論であることから中國文學を詩で以て代辯させるといふのも故無きことでない。その切り口となるのが〈詩壇研究〉ということになるが、これについても赤井氏は次のように述べている。

本書は、著者の卒業論文以來、中唐詩壇の研究について、韋應物や白居易を中心に進めてきた成果である。

『中唐詩壇の研究』とは銘打つものの、韋應物や白居易を通してみた中唐詩壇の研究という色合いが濃い。

しかし、歴史の意味もまたそこにあると考へる。(第一頁)

そもそも〈詩壇〉とはどのように定義されるべきものであろうか？ それは當時に在つて最も大勢を占めていた文學的風潮やその當時の文學上の重鎮について語れば、もつとも理解されやすいであろう。赤井氏の關心の多くは中唐前期に當たる大曆期に在るが、同じく大曆期を研究對象とした蔣寅氏の『大曆詩人研究』はこの時期の詩人たちを「江南地方官詩人」「臺閣詩人」「方外詩人」の三つに分類して、網羅的に彼らを論じている。^③ 本書の第一部で取

り上げられている主要人物は劉長卿と韋應物であるが、その二人を蔣寅氏は戴叔倫・李嘉祐などと一緒に「江南地方官詩人」として論じている。大曆期の〈詩壇研究〉はこのように當時の詩壇をひと渡り見渡されたものであるか、或いは令狐楚が勅を奉じて編纂した『御覽詩』の選詩状況にも見られるように、「臺閣詩人」として蔣寅氏が扱う大曆の十才子を中心に語れば〈中唐詩壇〉の説明はつくように思われる。〈詩壇〉ということばに時間軸に於いてあまり幅を持たない平面的な分布、或いは中心から外へ向かう影響力といったイメージが付きまとうからである。しかし本書で語られる〈中唐詩壇〉はそのようなものでは全くない。第一部全體及びその第一章の標題は「大曆から元和へ」となっているが、第一章には更に副題が添えられていて、それは「中唐」の文學史的意味」となっている。そして第二章、第三章で劉長卿と韋應物が語られるのであるが、即ちこの構成に盛唐から大曆へ、そして大曆から元和へという文學史的意味を劉長卿と韋應物の二人で語り得るといふ赤井氏の強い確信を読み取ることができよう。確かに〈臺

閣詩人〉に分類される大曆の十才子からは當時の〈詩壇〉の風潮は語り得るであろう。しかしいわゆる〈臺閣詩人〉では到底、創り出し得ない價值觀を劉長卿や韋應物にあることを本書は説いている。本書が『中唐詩壇の研究』と命名されていることに、前述のような理由から違和感を覺えるのではあるが、しかし中唐という時代の文學史的意味を提示された時に、そこに同時に今まで見えてこなかった中唐の文學がくつきりと浮かび上がってくるようである。つまり赤井氏は中唐文學研究の視座を（一）文學の規範性、（二）文學の擔い手、（三）文學における影響關係（第四頁）という點に設定している。その結果、〈以上の文學史における變化展開の規準を考察する時、「中唐」という時代は、以下の點で文學史に重要な位置を占めると考えられる。①文學の規範性およびその變化に自覺的・自律的に関與しようとした。②「個我」意識のもとで、文學本來の意味を追求しようとした。③「文人」における處世觀・自然觀などの所與の枠組みに變化を來した〉（第七頁）という結論を導き出すに至るのである。これが赤井氏のいわゆる

〈中唐詩壇〉を支えるものといえよう。

赤井氏は文學史の時代區分について〈歴史區分をそのまま襲用するのではなく、文學の内的な要因や相互關係、發展法則の有無を考察することによって、かえって文學史が歴史區分に新たな視點を加えることにもなるだろう〉（第四頁）という。評者が本書を通讀して先ず感じたものは、全篇がまさしくこのような態度で貫かれているということであつた。つまり〈歴史區分の規準になつた概念、例えば政治體制の形態・權力の形態、個人に及ぶ支配關係などは、文學と深く關わるとはいへ、直接文學を語ることにならぬいからである〉と斷じるのは、あくまでも文學を以て、文學を追求し、文學を語ろうという、赤井氏の表明に他ならない。『日本中國學會五十年史』に「中國研究この五十年」と題して、その「文學」の項を擔當した興膳宏氏や、また同書の「これからの中國研究（座談會Ⅱ）」に於ける平田昌司氏の嘆きもこれに通じるが、あくまでも詩人のことばからしか、詩人の心を、或いは詩人の世界を語り得ないということを、文學研究に従事している私たちはもう一度、振

り返つてみなければならぬのかも知れない。中國に於ける中國文學研究でよく文史結合が特筆すべきこととして擧げられるが、これは史學の領域に分け入つていっても、必ず文學に立ち戻るべきことは言を俟たない。

第 I 部

本書はひとことと言うならば、中唐に始まつて中唐に返るといつてよい。それは〈中唐〉という時代の意味してきたもの、そして眞に意味するものを明らかにするということである。本書の構成を見て明らかのように、第一部、第一章に「大曆から元和へ——『中唐』の文學史的意味」を置いて、〈中唐〉、そしてその内實である〈大曆〉と〈元和〉のそれぞれの持つ意味についても一度、整理し確認するのである。つまり南宋の『滄浪詩話』で體格によつて（中唐が）〈大曆體〉〈元和體〉と區分されたものが、明の『唐詩品彙』ではそれぞれ〈中唐の再盛〉〈晚唐の變〉というふうに分けられるようになる。これは體格ではなく、時間によつて區分されているというのである。その變化に

は元の『唐音』が大きく影響しているのであるが、『唐音』が考える〈中唐人の詩〉は大曆期のものを指しているのみならず、それが〈盛唐〉の詩と併せて〈正音〉に分類されていることから、元和期以降のものとは一線を劃すことになるはずである。そしてその大曆・元和の兩期を區分するに〈正〉と〈變〉という概念が用いられる。〈變〉が『唐詩品彙』のように時代區分から使われれば、〈盛唐〉から衰微していく意味しか賦與されないが、〈盛唐〉の文學規範から逸脱（第二五頁）という變化と捉えるならば、積極的な意味が賦與されることも、元和期の文學の有り様がそれを裏付けている。一方、大曆期については、『唐音』において「正音」が「盛唐正音」と「中唐正音」からなり、しかもその「中唐」とは大曆期をもつぱら指す以上、「正音」の在り方に、盛唐を標準とした文學觀がやがて構造的にもつようになる規範内の異質性を指摘でき、その變容を見ることができらるであろう（第二五頁）と讀み解き、かくして元和期と異なり、また盛唐とも同じでない大曆期の文學がクローズアップされることになるのである。『唐音』につ

いて〈入選の狀況より見れば、すべての詩體にわたつて盛唐は王維が、中唐は劉長卿・韋應物が「正音」の流れとして指摘でき、いわば「雅正清麗」なる詩風をその規準として考えているようである〉（第二六頁）というのが、赤井氏がこの第Ⅰ部第二章で劉長卿を、そして第三章で韋應物を取り上げている理由に繋がつていくのである。劉長卿を冒頭に置くのは蔣寅氏の『大曆詩人研究』も同様で、その理由を〈彼が大曆期で最も有名な詩人であるだけでなく、彼の詩歌に盛唐のパターンを残しつつ、大曆の詩風の主な特徴が最もはっきりと表れているからである〉^⑤という。

第三章の「韋應物詩論——屏居の位相を中心に」は韋應物の文學的特質を捉えているのみならず、中唐以降の文學的特質とも大きく關わることは、第Ⅱ部、第三章「閑適詩考——「閑居」から見た閑適の理念」の第三節「韋應物の『閑居』」及び第Ⅴ部、第二章「郡齋詩について」を讀めば理解できるであろう。赤井氏はいう、〈善政の具現とそのためのお仕には執着を見せた韋應物であるが、頓挫による退任にはむしろ恬淡としている。屏居のよりどころは何

だったのであるか(第七三頁)、(官にはじかれ、……これらを「保養」するということは、退居における消極的な處世というよりは、むしろ積極的に退隱の意味づけを行おうとした結果ではあるまいか(第七四頁)と。つまりこれが白居易が《兼濟と獨善》を實踐する先驅者として捉えた(第五七頁)理由なのである。また(韋應物の屏居のすべてが寺院であることも、ここに至り問われなくてはならない(第七四頁)と指摘する。寺院と讀書人(受験生)との關係は赤井氏が引用するように、既に嚴耕望氏にたいへん優れた論考がある。例えば、「唐人讀書山林寺院之風尙——兼論書院制度之起源」は唐代中葉以降、讀書人たちが山林寺院で勉強する風尙が盛んになったことについて、①經學が廢れ、文學が盛んになったこと、②名家が没落し寒士が登用されるようになったこと、③佛教の隆盛、④一般文人が山居するようになったこと、⑤山林寺院に藏書があったことを指摘するが、赤井氏は④の一般文人が山居するようになったという事象を韋應物の「寺院詩」との關係で突き詰めていき、韋應物の文學の特質を明確にしてみせたの

である。これは前述の文史結合の好個の例と言える。一八九四年に發表されたこの論考は一九九五年に出版された蔣寅氏の『大曆詩人研究 上編』で韋應物を論じるに際して、同じく一九八四年第四期の『文學遺產』に掲載された儲仲君氏の「韋應物詩分期的探討」と共に引用されている。即ち(日本の學者赤井益久氏は殆ど同じ時期に仕隱交替という特殊な經歷から着手し韋應物の詩の「高雅閑澹」の風格の成因を探求している)と紹介され、蘇州刺史時代から永定寺への屏居を付け加えて、赤井氏が示す出仕と退隱(屏居)の具體的對應關係が引用されているのである。ここに韋應物研究が内外の人たちによって着實に積み重ねられていくのを見ることができよう。

第 II 部

第 II 部第一章の「韋應物と白居易」は一九九三年の「先行文學と白居易——韋應物を中心として」が元になっている^⑧。白居易を論じる場合、〈諷諭詩〉及び〈閑適詩〉が大きな關心事となる。なぜならばその両者がうまく共存して

いることが未曾有のことであるからであり、ここに白居易が元和という時代に生きたこと、或いは時代が白居易を生み出したことを文學史の中で再確認される必要が出てくるのである。これについて一九九一年に川合康三氏が「白居易閑適詩放」を發表し、〈閑適〉が〈その長い人生の前半では「諷諭」と相並び、後半ではほとんど中心といつてもいい位置を占めるように、彼の文學の本質に關わるものであった〉と結論づけるが、それは主に白居易自身の履歴に沿つて〈閑適〉の意味と位置を詳細に分析してみせている。^⑨

一方、赤井氏は白居易が「與元九書」(那波本『白氏文集』卷二十八)で〈僕不能遠徵古舊、如近歲韋蘇州歌行、才麗之外、頗近興諷。其五言詩、又高雅閑澹、自成一家之體〉と評することについて、〈「比興」を有する歌行が「諷諭詩」に、「高雅閑澹」と評する五言詩が「閑適詩」に相當しうるとみなした、と考へられるからだ。つまり《兼濟》^⑩諷諭詩、《獨善》^⑪閑適詩の文學における二元性のいち早い先蹤として韋應物は顯彰されているのである〉(第一〇八頁)と記すように、韋應物を先驅者と位置づけるところに

川合氏とは異なる視點がある。確かに赤井氏が韋應物の閑居(閑適)の心持ちを説明するために引く「幽居」詩の〈獨無外物牽、遂此幽居情〉(第二二〇頁)とは前掲の「與元九書」で白居易が〈諷諭詩〉の後の〈感傷詩〉を〈又有事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於歎詠者一百首、謂之感傷詩〉と説明するのと見事に對照を成していることからその影響を知ることができる。またこの〈閑居〉について、〈謝朓(四六四—四九九)が、既に祿を懷ふの情を歡ばしめ、復た滄州の趣に協ふ……と歌い、「懷祿情」すなわち《出仕》、「滄州趣」すなわち《退隱》が對蹠的に詠じられている。謝安や謝朓はその生涯において、陶淵明のように官界と訣別して隱棲したわけではない。……しかし同時に前述したごとく誰でも陶淵明のように生きることは困難であつたうえは、《出仕》と《退隱》の相克を内包するものではないが、その處世觀は後世の士人達からは受け入れやすい部分であつた考へられる〉(第二一〇頁)と指摘する。蔣寅氏の『大曆詩風』も特に第三章に「時代の偶像——大曆詩風と謝朓」と命名して、赤井氏と同じような問題

を提起している。確かに謝朓は唐人の心を捉えて離さないものがあつたようで、唐末の韋莊も「又玄集序」に次のように引く。

謝玄暉文集盈編、止誦「澄江」之句、曹子建詩名冠古、唯吟「清夜」之篇。是知美稼千箱、兩岐爰少、繁絳九變、大殊稀。……自國朝大手名人、以至今之作者、或百篇之內、時記一章、或全集之中、唯徵數首。但矜其清詞麗句、錄在西齋、莫窮其巨脈洪瀾、任歸東海。

韋莊は謝朓の詩すべてを評價するわけではないが、その中で「晚登三山還望京邑」詩を評價するその基準が〈清詞麗句〉だというのは、赤井氏が第一部、第四章、「第二節〈王韋〉から〈韋柳〉へ——『清』の意味」で〈その際に、留意すべきは中唐前期とも言うべき大曆期の詩人が多く「清雅」「清逸」「清迥」「清潔」などと評され、「清」が新たな規範性の據り所となっている点であろう。これは従来の文學規範がややもすれば明確な意圖と方向性を持つのに對して、一見して目立たぬ「沈靜」や「平淡」に價値を認め、景と情および文と質の微妙な關係、即ち對立矛盾す

る要素を一時無化し、一見すると無色無味ではあるが、かえつてその中に從來の枠組みを越える新たな可能性を見出そうとしたからではあるまいか（第八八頁）という〈清〉と繋がついていそうである。例えば、この韋莊は同じ晚唐の詩人、許渾について〈江南才子許渾詩、字字清新句句奇〉（《全唐詩》卷六九六「題許渾詩卷」）と評し、また宋の阮閱の『詩話總龜卷六』「評論門」には『詩史』を引いて〈許渾詩格清麗、然不干教化〉ともいう。これは白居易が「與元九書」で謝朓の「晚登三山還望京邑」詩について〈然則餘霞散成綺、澄江淨如練、離花先委露、別葉乍辭風之什、麗則麗矣、吾不知其所諷焉〉と美文調のものを否定しているのと實は根底では通じるものがある。「又玄集序」でいう〈清詞麗句〉を約めれば〈清麗〉になり、これが晚唐文學に於いても重要なタームに成り得るのである^⑩。

韋應物の閑居の特徴の一つとして、赤井氏は〈つまり、本來は《出仕》の典型的な《場》である官舎にあって、《退隱》の心のあり方を歌っている点である。韋應物は園

林や郊居を「閑居」の住みかと思なす一方で、「郡齋」「縣齋」において《退隱》の精神のあり方を觀照しようとする（第一六九頁）と述べ、また（韋應物が郡齋において觀照したのは、心のあり方を靜寂にし、「道」を冥々の中に悟ることであつた）（第一七三頁）と結論づける。これは第V部、「第一章 中唐における『吏隱』について」とも大いに關わるが、そこでは（その際に看過できぬのは、隱逸詩人として「仕」と「隱」の間に搖れ動いた陶淵明の評價である。大曆詩人の陶淵明評は概して低いとはいへ、「吏隱」における思想・感情を考察するうえで、二謝とともに影響を與えたと思ななければならぬ。陶淵明の處世をふまえ、その「閑居」を自らの處世の範としたのは韋應物である。「吏隱」の處世觀を檢討する上で、大曆期から元和の重要な位置を占めると思う）（第四五九頁）と述べ、陶淵明の影響を指摘しているが、次のような指摘もこれを補強するものになるのではないだろうか。即ち袁行霽氏がその著『中國詩歌藝術研究』の中で「中國古典詩歌的多義性」という項目を立てて、「雙關義」を説明するのに陶淵明の

「歸田園居」詩を例として次のように解いている。^①

又如、「虛室」這個詞，陶淵明在《歸田園居》裏兩次用到它：「戶庭無塵雜，虛室有餘閑。」「白日掩荆扉，虛室絕塵想。」前一個「虛室」與「戶庭」對舉，後一個「虛室」與「荆扉」連用，可以理解爲虛空閑靜的居室。又見於《莊子·人間世》：「瞻彼闕者，虛室生白，吉祥止止。」陸德明《經典釋義》引司馬彪云：「室比諭心，心能空虛，則純白獨生也。」陶淵明所說的「虛室」又是用《莊子》的典故，指自己的內心而言。在陶詩裏這兩種意思都有，造成多義性。

ここから陶淵明の影響はその處世の在り方のみならず、赤井氏がいうように《退隱》の精神のあり方を觀照することや（心のあり方を靜寂にし、「道」を冥々の中に悟ること）に於いても深く關わっていることが知れよう。

第四章「白詩風景考——『竹窗』と『小池』を中心として」では（閑居における環境とその中における精神・感情との交融は、多くの場合、認識の反映としての「風景」を借りて表白される）（第一八四頁）というところから、當時

の文人の宇宙觀を分析し、それが隱逸と結びつきやすいものであったことを論證する。その例として〈壺中天〉を引いて〈この「壺中の天地」の考え方こそ、王毅氏が指摘するように、六朝貴族の莊園や山林における大規模な遊山や跋渉から、小規模な庭園が士人の間に普及する契機ともなつた。じつに隱逸文化の變遷の上で畫期的な發想の轉換であつた〉(第二九七頁)と述べている。この〈壺中天〉については白居易とほぼ同じ頃の張仲素の「窗中列遠岫賦」(『文苑英華』卷三〇)にも〈疑鏡裏覺萬象之俱深、又似壺中見三山之尙遠〉とあり、當時の文人たちの共通認識があつたことの證左に成り得よう。これはまた繪畫にも密接に繋がるようでもあり、また赤井氏も第V部、第四章に「中唐の『意境説』をめぐって」と題するように、意境論にも通じるようにも思われる。即ち張彥遠の『歷代名畫記』に載せる劉宋の宗炳の「畫山水序」に白絹に透かして見ると〈嵩華之秀・玄牝之靈、皆可得之於一圖矣〉という有名な話の中に、〈夫理絕於中古之上者、可意求於千載之下。旨微於言象之外者、可心取於書策之内。況乎身所盤桓目所綢繆、

以形寫形、以色貌色也〉ということばが見えるからである。^②

第 III 部

諷諭詩の問題は閑適詩とともに、本書の大きな骨格を成していると言える。赤井氏はここで白居易の「新樂府」に至るまでを唐代古文運動の中に置いて整理・補足を行おうと試みるが、その中で取り上げる顧況については既に小西甚一氏に「顧況の諷刺詩——上古之什補亡傳十三章について」と題するかなり刺激的な論文があり、赤井氏の論考もこの小西氏の基礎の上に在ると見受けられる。小西氏はその論考の終わりのあたりで元結の「二風詩十篇」「補樂歌十首」「系樂府十二首」が顧況の諷刺詩「上古之什補亡傳十三章」の創作にある影響を及ぼしたことは疑えないであろうと確信しているが、これは古文運動形成の過程を見る上で重要な指摘で、赤井氏もそれをしっかりと承けている。その顧況が書いた「文論」の〈其實行也、文顧行、行顧文、文行相顧、謂之君子之文〉というくだりについて、赤井氏は〈文學と行爲が相俟つて成立すると考え、文が文のみで

獨立するとは考えていない。その文學觀は文學に道を求め、實踐を重視した韓柳の古文運動と連絡するといえよう

(第三三二頁)と指摘する。これは林田愼之助氏がその著『中國中世文學評論史』の中で、唐代古文運動の形成過程について分析した際、第一次古文家集團の一人に數えた李華の「贈禮部尚書孝公崔沔集序」(『唐文粹』卷九二)にも「文顧行、行顧文、此其與於古歟」という嘆きがある。用例的にはこの二人の文にしか見られないようであり、そうすると益々、顧況の古文運動に於ける役割は重要になってくるであろう。

それにしても諷諭詩の傳統は時代が降れば、唐末の皮日休の「正樂府」のようなものしか見られず、低調を極める一體、これはどのように説明されるべきか。或いは、白居易の文學にも既に見られた如く、閑適詩が諷諭詩に對峙するものとして存在するのではなく、それ自體に獨立した意義を見出された時に、諷諭詩が却って作品としての輝きを持ち得なくなったことに起因するのであろうか。

元稹の諷諭詩は白居易との關わりで大きな意味を持つが、

その元稹の諷諭詩が表現技巧上、大きく變わるものがあつたことについて赤井氏は「これら「寄興」「感物寓意」の重視こそ元稹の文學に轉機をもたらしたのであり、それは元和五年の「江陵途上十七章」を契機とする」(第三三二頁)と指摘する。これは「江陵途上十七章」に答えて作られた白居易の「和答詩十首序」(元和五年、那波本「白氏文集」卷二)に「發緘開卷、且喜且怪。僕思牛僧孺戒、不能示他人。唯與杓直拒非及樊宗師輩三四人、時一吟讀、心甚貴重。然竊思之、豈僕所奉者二十章、遽能開足下聰明、使之然耶。抑又不知足下是行也、天將屈足下之道、激足下之心、使感時發憤而臻於此耶。若兩不然者、何立意措辭、與足下前時詩如此之相遠也」(第三〇八頁)と記されるように、(これまでの元稹の詩との間にある著しい相違)(第三二九頁)があるということに據っている。もう少し赤井氏のこゝとばを拾えば、(しかし、ひるがえって文學における「直言」は、その内容についてはさることながら、表現技巧上は必ずしも積極的價值をもって捉えることはできないのであるまいか)(第三二〇頁)と述べ、(元和五年までの度

重なる挫折をへて「直質」をつきはなして見る餘裕が、「比興」を重視する詩風（第三三七頁）に變わつたとある。白居易の「和答詩十首序」には自分たちの作文の傾向について次のように述べるくだりがある。

頃者在科試間、常與足下同筆硯。每下筆時、輒相顧語。患其意太切而理太周。故理太周則辭繁、意太切則言激。然與足下爲文、所長在於此、所病亦在於此。足下來序、果有詞犯文繁之說。今僕之所和者猶前病也。待與足下

相見日、各引所作、稍刪其煩而晦其義焉

赤井氏はこれを本書では省略しているが、本書以後に書かれた論考、「元稹の政治と文學」では「和答詩序」の末尾には、制科を目指して共に勉強して以來の文藝の特徴を、「意太だ切にして理太だ周なり」に認めていた。言わんとすることに急で餘裕なく、また用意周到でくだいほどという意であろう。元稹が寄せた十七章には、この點に言及する序が付されていたという。元稹は、明らかにそれまでの詩風と意識的に異なるものを作り上げようとしていたのである。「直言」は必要でもあつた。だがそれに急な餘り、

周囲との摩擦軋轢を生じて本來の目的が達成されないのも本意であつた。こうして都を逐われ、江陵に流されて、それまでの自分を多少突き放してみる餘裕を持つに至つたのである」と補っている^⑧。前掲の「和答詩十首序」には「發緘開卷、且喜且怪。僕思牛僧孺戒、不能示他人。唯與杓直拒非及樊宗师輩三四人、時一吟讀、心甚貴重」というくだりがあるが、これは白居易の「與元九書」の中に「賀雨」（卷二）、「孔戡」（卷二）、「秦中吟」（卷二）、「登樂遊園望」（卷二）、「宿紫閣山北村」（卷二）といった諷諭詩が時の權力者を怒らせたとし、「不相與者、號爲沽名、號爲詆訐、號爲訕、謗。苟相與者、則如牛僧孺之戒焉」というのと重なる。また赤井氏は元和十五年（八二〇）、時の宰相令狐楚へ自作の詩を獻呈した折に添えた手紙について次のように述べる。「稹自御史府謫官、於今十餘年矣。閑誕無事、遂專力於詩章。日益月滋、有詩句千餘首、其間感物寓意、可備矇瞽之風者有之。詞直氣粗、罪尤是懼、固不敢陳露於人（……）」と述べる「感物寓意」は、「比興」のはたらきを言う。謙辭と思われる「詞は直」という表現も、か

えつて「比興」の意圖をものがたる」(第三三三頁)。元稹がここで「詞直氣粗、罪尤是懼、固不敢陳露於人」というのも、諷諭詩の持つ怖さを言っているのであり、「詞直氣粗」は額面通りの意味で、これも前掲の「牛僧孺の戒」に繋がっているのではないだろうか。元和四年に作られた白居易の「新樂府序」(那波本『白氏文集』卷三)には「其言直而切、欲聞之者深誠也」とあるが、それは「和答詩十首序」で「所長在於此、所病亦在於此」というところの内の「所長」という確信に裏付けられてのものである。それはまた「寄興」のあることを妨げるものではないのではないだろうか。

赤井氏は元稹の「敘詩寄樂天書」(『元稹集』卷三十)から、元稹の詩を「古調」(樂調)「律調」(新題樂府)「古體」(七言・五言律詩)「悼亡詩」(豔詩)の八種に分類し、これを更に「諷(寄興)」の有無に分けるのである。すると前掲の令狐楚に献上した詩について「輒寫古體歌詩一百首、百韻、兩韻律詩一百首、爲五卷、奉啓跪陳」(「上令狐相公詩啓」というその内容が實は「諷(寄興)」に關わるも

のではなかったことが知れ、また『舊唐書』卷一六「元稹傳」がそれを讀んだ令狐楚について「楚深稱賞、以爲今代之鮑(照)・謝(朧)也」と記していることの意味がよく理解でき、また文學を介しての兩者の關係も窺い知ることができるようでもある。

第 IV 部

孟郊と韓愈との關係について、これまで韓門の一人としての見方しかされなかつたことについて、赤井氏は「蘇軾・元好問ら有力者の發言が増幅され、下上にならうの常で、その面が強調される嫌があつた。したがって、韓愈との關係や孟郊内部の詩風創出に關わる研究については出遅れの感が否めない。とくに韓愈にとって少なからぬ影響を與えた詩人としての位置をもつとすれば、兩者の邂逅以前に遡つて孟郊の詩の軌跡をたどり、その独自の詩風とは如何なるもので、何時ごろ定立したのかを探ることが重要になってくる」(第三八九頁)と指摘する。この第三章「孟郊論——仕官前の恬澹と執着」は一九八〇年發表の「孟郊

詩風詩論、及び一九八二年發表の「孟郊遊適詩考——

『石淙十首』の位置」が元になっているが、齋藤茂氏の孟郊に關する一聯の論文にも見られるが如く、この頃から本格的に孟郊の研究がなされてきたと言える。

赤井氏はいう（孟郊よりやや遅れた元稹・白居易らが同じ改革意識に出ながら、傳統的文學觀に立つた諷詩・諷諭詩としてその改良意識を整理し理論化したのと異なり、孟郊の場合はそれを體係づける《仕隱》の理念や諫官としての自覺などが内部で均衡を失いかげ、あるいは全くの絶望としてしか存在しなかつたのである。改良意識を岐點として、白居易と孟郊の展開した詩風は、前者が政治と不可分であるのに對し、後者は政治にはじき出されて詩道の他に自己表白の法を持たぬ點で、永續的かつ個性的な特徴が顯著であると言えよう）（第四〇七頁）と。また（多くの場合、これらの句は孟郊を取り圍む世界の險阨・岨嶮・不均衡を山水自然に假託している。いわば孟郊が對立し、疎外され、壓迫を受けた醜怪で暗澹たる世界をイメージ化しようとしたと言える）（第四一二頁）という分析を、齋藤茂氏が「孟

郊（石淙十首）について——聯句から連作詩へ」の注⑦で

（孟郊には鋭く、堅く、冷たいものに對する嗜好があつたようで、そうした性質を持つ自然物を意識的に取り上げる傾向が見られる。特に晩年には、それらが却つて孟郊自身を傷つけ苛むものとして歌われるようになり、そうした苛虐的な自然像が一つの特徴となつている）^⑧というのと併せてみると、より理解しやす^⑨い。赤井氏はそれを（山水詩が時間的推移によつてどう變貌するかが主題となるので、製作年の推定できる作品を中心に考察）（第四一三頁）した結果、（一度目の下第、「石淙十首」製作以前はそうした世界（※現實との齟齬や軋轢を感得した折に、逃避し苦惱を忘却できる世界）は京師洛陽近くの山川にもみとめられ、孟郊の故郷である江南地方にもみとめることができる。下第や不遇の不満もとくに山水詩をかりて描出するわけでもなかつた。むしろ直截に悲憤や慷慨を吐露している方が多い。ところが「石淙十首」や「遠遊聯句」を作つた貞元九年（七九三、四十三歲）前後より、「北」の京洛「南」の故郷の圖式に、「自己を受け入れぬ社會」と「理想郷」との意味がそれぞれ

れ強調され、増幅しはじめた（第四三九頁）という結論を導き出している。この孟郊の詩風の變化はよくわかる。ただ第四二二頁以降「（口）華山・靈巖山」で引用される「遊華山雲臺觀」詩の製作年は明示されず、また「石淙十首」については「石淙十首」及び「遊韋七洞庭別業」は、華忱之『孟郊年譜』（孟郊詩集校注附載）によれば、共に貞元九年（七九三）再度の下第のあと、三年後に登第するまでの間に作られた、ほぼ同時代の作であるとして繫年されている（第四二八頁）というところで注（24）を打ち、齋藤氏の前掲論文「孟郊〈石淙十首〉について——聯句から連作詩へ」を引いて「……元和初年（八〇六）頃に作られたと考える説がある」（第四四三頁）という。齋藤氏の論考は「石淙十首」の制作年代が大きな意味を持つだけに、かなりの紙幅を費やして元和初年に繫年することを論證している。また「遠遊聯句」についても、赤井氏は〈從來、この詩も元和年間の作とされていたが、華忱之『孟郊年譜』は、内容と兩者の事跡に照らし合わせて、貞元九年（七九三）の製作と考える〉（第四三六頁）というところで

注（26）を打ち、〈錢仲聯集釋『韓昌黎詩繫年集釋』（上海古籍出版社、一九八四）は、「遠遊聯句」を貞元十四年に繫年している〉（第四四四頁）と記している。齋藤氏の前掲論文は「遠遊聯句」は貞元十四年に、楚越の地方へ遊歷の旅に出る孟郊を送って汴州でなされた聯句と考えるべきである〉（第一〇九頁）といい、その注④に錢仲聯氏の『韓昌黎詩繫年集釋』を掲げている。實は齋藤氏の論考は赤井氏の前掲の論考より後に書かれており、本書を編纂するに當たつて、赤井氏は最近の成果として齋藤氏のものを紹介すべく注に加えたのであろうが、逐一、時間の推移に沿って孟郊の詩風を窺おうとするなら、詩の繫年についても少し説明は費やされてもよいだろう。

第 V 部

「中唐における『吏隱』について」は一九九三年の論考が元になっているが、その同じ年に赤井氏は蔣寅氏の『大曆詩風』（一九九二年）の書評を書いている。¹⁷ 蔣寅氏のそれは赤井氏が対象とする時期・詩人・主題など重なるところ

が少なくない。つまりこの書評から逆に蔣寅氏とは異なる赤井氏の視點、或いは見解を知ることができるのである。

例えば、この〈吏隱〉の問題について、蔣寅氏は「第三章時代の偶像——大曆詩風與謝朓」で言及しているが、赤井氏は「一言しておきたいのは、しばしば論及されしかも術語として重要な「吏隱」の定義が判然としないことだ。：

：著者が據證する大曆期の「吏隱」の例が、初盛唐期の用例といかような差異を呈するのか。また、大曆詩人自身の「吏隱」にみとめた意味を今少し嚴密に定義して欲しかった。唐代の處世觀の推移の中で提出されるとさらに説得力を増したと考える」と指摘するが、裏を返せば、それが本書が特に力を注いでいるところでもある。つまり初盛唐期は〈吏〉と〈隱〉を兼ねることに價值を見出していたものが、大曆期には〈如上の用例から憶測すれば、多分當初は下級官吏を自他ともに卑下する意識を和らげるための口吻であつたものが、やがて士人の意識の變化から肯定的な意味合いも含まれていったのではなからうか。つまり、當初は下級官吏の「吏」の中に老子や莊子が隠れた傳承のごと

く、「吏の中に隠る」という矜持によつてその下級である意識を緩和した。そのなかから「吏」そのものを「隱」と同一視する「吏を隱と爲す」考えが混在していったのではなからうか。「吏の中に隠る」という意識のうえで「吏」の價值は上がることはない。一方、「吏を隱と爲す」という意識では「吏」は「隱」と等價となる。大曆期以降の士人の「吏」に對する意識の一斑として興味深い」（第四五八頁）と分析するのである。この〈吏隱〉の意味をよりよく解く鍵となるものが、〈郡齋詩〉である。これについても蔣寅氏は前掲書「第四章 主題的取向」「隱逸的旋律」で章應物の〈郡齋詩〉が仕官と隱逸を説く鍵になることを指摘するが（第九一頁）、赤井氏は書評で〈著者は章詩の特色として「郡齋詩」を指摘しながら、「吏隱」の概念にゆれがあるため、その眞價が問われていない憾みがある」と評している（第一五一頁）。この〈郡齋詩〉について赤井氏は〈しかしながら、初盛唐期の「郡齋詩」が左遷の不遇や無聊を嘆く傾向が強いのに比して、中唐以降は地方への赴任を歸隱とみなして優遊し、郡縣の治政に生きがいを見つけ、

新たな處世觀を思索のなかに探求する傾向が認められるのは、新しい展開といえよう。そうした風潮が、後かならずしも州縣の公府でない書齋の普及に影響を與えたのではなからうか（第四七二頁）と述べる。これは當然、白居易の〈吏隱〉や〈郡齋詩〉にまで行き着くのであるが、赤井氏はそこに韋應物の介在を強調するのである。韋應物に「月夜會徐十一草堂」詩（『韋蘇州集』卷一）があり、その冒頭に〈空齋無一事、岸幘故人期〉と詠んでいるが、これは〈空齋〉に居る韋應物が相手の〈草堂〉に出掛けていくのである。韋應物の詩に〈草堂〉ということばは三例しかないもので、その影響關係を直ちに論じることができないが、彼の有名な白居易の廬山の〈草堂〉も赤井氏が明らかにしてきた〈吏隱〉の脈絡の中で捉えられるべきものなのであらう。

「中唐の『意境説』をめぐって」では韋應物の詩を枕に持ってきている。そして中唐に至るまでのいわゆる〈言意の辨〉について要領よく説明を加えているのだが、韋應物の「雲陽館懷谷口」詩にも〈念昔白衣士、結廬在石門。道

高杳無累、景靜得忘言〉（『韋蘇州集』卷六）と詠まれるように、陶淵明の「飲酒」其五の〈山氣日夕佳、飛鳥相與還。此中有眞意、欲辯已忘言〉は〈言意の辨〉を論ずる際にも、缺かすことはできないのではないだろうか。また赤井氏は〈禪はきわめて内省的であるがゆえに、悟達の境地が自然詠の詩に託され形式として定着すると、言語表現にとらわれ凝集注止すべき精神のはたらきが輕視されがちになる。

こうした反省があつて、從來の「言意の辨」を超える高次の概念を考えざるをえない契機となつたのではなからうか。それが中唐の詩僧皎然（七二〇？—八〇〇？）によつて唱えられた「境」である（第五一六頁）と述べて「意境説」の形成に詩僧、皎然の影響が大きく與かつたことを述べる。

〈境〉を唱えたその草分けは王昌齡であろう。それは『詩格』（『文鏡秘府論』「南卷」「論文意」）の第五段に〈夫作文章、但多立意。令左穿右穴、苦心竭智、必須忘身、不可拘束。

思若不來、即須放情却寬之、令境生。然後以境照之、思則便來、來即作文。如其境思不來、不可作也〉とあり、また第六段及び第四十一段にも〈意〉と〈境〉の密接な關係を

論じているが如くであるが、『詩式』や『詩議』に見られるように皎然の創作論及び彼の詩作はもつと研究されるべきであると考ええる。それは中唐以降の詩格の研究に於いて缺かすことができないばかりか、その後の文學全體の有り様を考える上で極めて重要であると考えられるからだが、日本ではこの方面の研究が殆ど進んでいない。¹⁸⁾

おわりに

中國では二十一世紀に入るに當たつて、それまでの研究を振り返つてみるというような状況があつた。唐代文學に限つてみても、例えば、『中國新時期唐詩研究述評』（二〇〇〇年）・『隋唐五代文學研究（上・下）』（二十世紀中國文學研究叢書 二〇〇一年）・『二十世紀唐研究』（二〇〇二年）といったものが出版されているし、また中國社會科學院文學研究所のホームページにも蔣寅氏が「回眸二十世紀八十年代以前的唐代文學研究」及び「二十世紀後期唐代文學研究述評」と題する文章を公表している。¹⁹⁾これは殆どブームと云つてよいほどで、蔣寅氏はまた「人民網」のホームページ

ジに「四代人的學術境遇」と題する文章も載せている。²⁰⁾〈四代人〉とは、民國年間に活躍した第一世代、新中國成立前後に育つた第二世代、文革前の學生や八十年代はじめに院生だつた第三世代、そして第四世代は文革後の世代を指すとしているが、このように世代ごととその氣質を語るうとするのは何も學術世界の話に限つたものではなく、衆知のように政界でも既に第四世代にあると言われて、この他、映畫界でも一九八〇年以降を第五世代と設定しているようである。もつとも中國の學術界に於いてこのような呼稱が普遍的に使用されているとも言い難いようでもあるが、問題はこのように二十世紀の中國文學研究を總括してみるとか、或いはある世代がどうかという彼の中國に比して、我が日本の場合はどうなのかということである。もつともこれまでの研究を振り返つて、そして今後の展望を見出すうということとは我が國でもあることはあつた。昭和二十四年（一九四九年）に創立された日本中國學會が五十年めを迎えるのを記念して、『日本中國學會五十年史』が出版された。²¹⁾そこには「中國研究この五十年」と題して、「文學」

(その他に「哲學・思想」「語學」)について執筆した興膳宏氏が(現在から遡った近五十年の意味をより大きな時間のスケールの上で確かめるために、それ以前の五十年との對比という比較の視點を導入してみることにしよう。より單純化していえば、明治以來の五十年と、戦後の五十年とは、中國文學研究の質においていかなる大きな差異が見られるか、ということである)と述べているが、日本に於ける中國文學研究を回顧するに當たつて設定された、この始點と時間的な幅が中國で二十世紀を振り返ると重なることは、勿論、決して偶然ではない。同書に「これからの中國研究(座談會Ⅱ)」を載せ、「一 中國研究の現況——一九七〇年代以降を中心に」・「二 二十一世紀を目指す中國研究」という視點が設定されているのも、回顧と展望が研究に缺かすことのできないものという認識に立てばこそである。しかしこのような企畫は多くはない。そこで中唐文學研究に限つて言えば、この十五年ほどの間の狀況についてまことに特筆すべきことが多く、蔣寅氏は『二十世紀唐研究』「第四章 文學」「六 日本、韓國的唐代文學研究」

で次のように紹介している。

統觀日本の唐代文學研究、中唐文學一直是研究者關注的熱點、所刊論著也最多。一九九〇年年、主要由年輕學者組成的「中唐文學會」成立、曾被日本中國文學研究界目爲「中國文學研究新的胎動」。他們的宗旨是加強聯繫和合作研究、多學科、多角度地考究中唐文學和文化。他們的論著更專門化、常以系列論文的形式鑽研一個問題、或建立一個觀察問題的角度、形成個性化的研究成果。(中略)他們在《創文》雜誌(第三四六—三五二期)發表系列論文、表達自己對中唐文學的總體看法。松本肇、川合康三編《中唐文學的視角》(創文社、一九九八年)一書作爲其群體智慧的結晶、既有文學史的觀照、又有關於題材和技巧之開拓方面的探討、還有社會政治、文人生活和藝術觀念的研究、無論涉及的對象和內容如何、背後都有一種整體的文學史眼光和綜合性的多元視角支持、體現了新一代學者在融合傳統與當代學術思潮中形成的作風細膩而又視野開闊的特點。

(第五六頁)

ここにこの十五年ほどの間の中唐文學研究に關しての大きな流れはほぼ盡くされているといつてよいがこれに加えなければならぬのが二つある。ひとつは右の蔣寅氏の紹介記事で評者が省略したものが、それは一九九九年に出版された川合康三氏の『終南山の變容——中唐文學論集』^②で、もうひとつが今回、評者が取り上げさせてもらつた赤井氏の『中唐詩壇の研究』である。主題研究は別として川合氏が元和に重きを置くのに對して、大曆に關心を寄せる本書は、一々具體的な論文名を示す暇はないが、これまでの研究の成果を着實に踏まえ、至つて慎重に論考を重ねている。今後、本書は中唐文學を志す者にとつて必讀の書となる條件を揃えているといえる。その條件には冒頭でも述べたように文學と眞つ直ぐ向き合つていふのも當然含まれているのであるが、評者自身は未だそれを衝き越えられぬいらだちをもつてここで筆を擱くしかない。

(創文社、二〇〇四年、五八八頁)

註

- ① 『中國讀書人の政治と文學』所收(二〇〇二年 創文社) 第三二六頁。
- ② 川合康三編『中國の文學史觀』所收(二〇〇二年 創文社) 第一〇一頁。この蔣寅氏の論考は津守陽氏譯。
- ③ 『大曆詩風』(一九九二年 上海古籍出版社)
- ④ 『日本中國學會五十年史』(一九九八年 汲古書院)
- ⑤ 『大曆詩人研究 上編』第一章 江南地方官詩人創作論
「二、承前啓後の名家——劉長卿」第二頁。
- ⑥ 嚴耕望『唐人讀書山林寺院之風尚』(一九五九年『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三十本 下冊)
- ⑦ 『大曆詩人研究 上編』第一章 江南地方官詩人創作論
「五、自成一家之體 卓爲百代之宗——韋應物」「高潔背後の世俗」第九四頁。
- ⑧ 『白居易研究講座』第二卷所收(一九九三年 勉誠社)
- ⑨ 『未名』(一九九一年 神戸大學中文研究会) 第九號所收。後に川合康三著『終南山の變容』(一九九九年 研文出版)に收録。
- ⑩ 加藤國安氏「許渾の幸福の報償詩——「清麗」か「淺陋」をめぐる」(二〇〇一年『集刊東洋學』第八五號所收)を參照。
- ⑪ 『中國詩歌藝術研究』「上編」「中國古典詩歌的多義性」(一九八七年 北京大學出版社) 第八頁。

- ⑫ 張彥遠『歷代名畫記』卷六。
- ⑬ 『中國文學論集』第四號所收（一九七四年 九州大學中國文學會）
- ⑭ 『中國中世文學評論史』第六章 隋唐時代の文學思想」
「第二節 唐代古文運動の形成過程」（一九七九年 創文社）。
林田氏も別の意圖ながらこの李華の文を引用している。（第六四八頁）
- ⑮ 『中國讀書人の政治と文學』所收（二〇〇二年 創文社
引用箇所は第三三六頁）
- ⑯ 『文藝論叢 平野顯照教授退休記念特集』第四二號所收
（一九九二年 大谷大學文藝學會）
- ⑰ 『中國文學報』第四十七冊所收（一九九三年十月 引用箇所は第一四八頁）
- ⑱ 『二十世紀唐研究』第四章 文學「二六 日本、韓國の唐代文學研究」（二〇〇二年 中國社會科學出版社）にも「文學理論也是日本研究較少的領域、……赤井益久『關於中唐的意境說』《國學院雜誌》92.4.1995'……」（第六五五頁）とさう。
- ⑲ 『中國新時期唐詩研究述評』（二〇〇〇年一月 張忠剛・吳懷東・張叡才・綦維著 安徽大學出版社）
- 『隋唐五代文學研究（上・下）』（二〇〇一年 二十世紀中國文學研究叢書 名譽主編季羨林・主編張燕瑾・呂薇芬 撰著 杜曉勤 北京出版社）
- 「回降二十世紀八十年代以前的唐代文學研究」（<http://www.cass.net.cn/chinese/s15|wxs/fengcai/jiangy/23.htm>）
- 「二十世紀後期唐代文學研究述評」（<http://www.cass.net.cn/chinese/s15|wxs/fengcai/jiangy/20.htm>）
- ⑳ 「四代人的學術境遇」（<http://www.people.com.cn/GB/14738/index.html>）
- ㉑ 前掲注④參照。
- ㉒ 前掲注⑨參照。